

留学生が日本語で防災考える

東海市の日本福祉大東海キャンパス(大田町)で30日、留学生を対象に「日本語で防災について考える出前講座」が開かれた。キャンパスに通う約70人が災害

ハザードマップを見ながら大学や避難場所を確認する留学生ら。東海市大田町の日本福祉大東海キャンパスで



日福大生 災害時の備えや行動学ぶ講座

時の備えや行動を考えた。講師を務めた市市民協働課の

さんは、「暴風警報」や「線状降水帯」

「緊急安全確保」など、災害時に使われる言葉を説明。市防災危機管理課の

さんは、市防災ハンドブックやハザードマップを学生たちと一緒に見ながら、一時避難ビルにもなっている大学の場所や避難場所を確認した。多言語で災害情報を提供する無料アプリも紹介した。

また、学生たちは母国で経験したことがない災害や、備え、自分たちができることをグループに分かれて話し合い、発表した。ネパールから3年前に来日したサヒ・ママタさん(23)は「母国は津波も台風もない。

安全な場所に避難してから家族に連絡することが大事だと学んだ」と話した。参加した学生たちは、いつでも、日本語のできない人を支援できる外国人になつた。(平木友見子)

できる。国際学部のカースティ祖父江准教授は「災害時に支援されるのではなく、日本語のできない人を支援できる外国人になつた。ほしい」と期待した。半田市の半田中学校避難所運営委員会による災害時のトイレ設置や疑似体験もあった。(平木友見子)